

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

ポート・オブ・サクラメント補習授業校

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯まとめ
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦勞した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

【所在地】 アメリカ合衆国 カリフォルニア州 サクラメント市
カリフォルニア州立大学サクラメント校の校舎を借用

【土曜日】 4時間授業 8時20分から12時半

【クラス数と生徒数】 (令和2年4月15日現在)

幼稚園 2クラス 33名

小学部 6クラス 86名

中学部 2学年2クラス 7名

高等部 2学年1クラス 5名

学校組織

【運営事務局】 理事3名、事務局2名、清掃員1名

【小・中・高校】 常勤教員9名（教頭〔校長代理〕、教頭補佐、小学部主任は担任と兼務）、
補助教員1名、ボランティア2名

【幼稚園】 園長1名、常勤教員4名、補助教員1名 ボランティア1名

② 現地の新型コロナウイルス事情

- 3月初旬サクラメント近郊で感染者の報告有
- 3月13日外出自粛・集会禁止令発動
- 3月17日にサンフランシスコ市がロックダウン。続いて、サクラメントもロックダウンに入り、政府が必要と指定したビジネスを除きすべて閉鎖
- 3月17日までにサクラメント近郊の学校は、全て休校を決定
- 現地校は、今年度一杯Distance Learningを行うことを決定し、イースター休暇明けからオンライン授業を開始
- 現地の学校では、オンライン授業のためのデバイスが生徒に配られ、オリエンテーションを行いDistance Learningの準備を整える。
- 5月15日の時点でカリフォルニア州の多くの大学が秋学期（12月まで）もオンライン授業を行うことを決定
- 5月20日現在、感染者は出ているが収束傾向にある。サクラメントの周辺でも感染者の出ているところと出ていないところあり（5月の感染者1,255人、死者56人）
- 5月20日から規制が緩和され多くのビジネスがオープン

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

- 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった理由としては、まず「サクラメント市内で感染者が出た事」。「補習校生徒が通う現地校の関係者に感染の疑いがあるケースが発生した事」。また、他の市でも感染経路を辿れない初の発症例が確認されたのも同じ時期。
- 急速に広がる感染ニュースが続く中、生徒や教員を含む補習校関係者が、補習校を通じて感染したとならない様、大胆かつ迅速な意思決定が必要だった。

④ 実際の取り組み

- まずはじめに本校で取り組んだのは、教員を含む学校関係者全員を対象にした緊急スクリーニングの実施。カリフォルニア州が緊急事態宣言を発令する前の話。
- スクリーニングは、当時CDCがハイリスクとして定めた国（中国、イラン、韓国、イタリア、日本）への直近14日以内の渡航歴、感染者やその疑いのある方との接触、又、風邪など感染と疑われるような症状の有無を質問し、校内の状況把握に努めた。
- その上で、補習校関係者に感染が確認された場合や現地校で感染が発生した場合、保護者の職場や生徒が通う習い事で感染が報告された場合等、濃厚接触を含めた様々なケースを想定し規定を作った。
- 更に、体調がすぐれない時は外出せず自宅に留まる、手で目・鼻・口は触らない、咳やくしゃみの際は手ではなく肘の内側を使う、頻繁な手洗いなど、各家庭での感染予防処置の徹底を促すと共に、毎時間の休み時間には担任の先生よりサニタイザーを使用して生徒の手を消毒してもらうなどしながら、通常授業に取り組んだ。

- しかし、その後3月11日に、補習校で教室を借りているサクラメント州立大学が、5月20日までの間、大学内の全てのイベントをキャンセルし、3月20日より大学内の全ての通常授業をオンラインとするという発表を受け、補習校も急遽休校とせざるを得なくなってしまった。
- 当初3月21日に予定していた卒業式は、日程を1週間早め、市内にある音楽施設の大型リサイタルホールを借り、卒業生とその家族のみの小規模開催という形で行った。
- 休校処置に伴い、昨年度末の修業式及び今月5月に予定していた運動会は中止。
- 4月4日予定していた入学式は延期となっている。

- 当初は5月20日までという大学側の発表だったが、補習校ではこの状況は長く続くと判断し、直ちに理事会、教員、事務職員と協議を重ね、新年度より新型コロナウイルスによる休校の間、オンライン授業で対応する事に決定。
- 4月4日に予定していた入学式・始業式は、各担任の先生より生徒と保護者を対象に、ビデオ会議機能を利用しオリエンテーションを行った。
- 翌週は前年度のプリントなどを使用した各家庭での復習週間とし、その間約2週間を使い、先生方にはオンライン授業移行への準備期間とした。
- 4月18日よりオンライン授業をしながら現在に至る。
- オンライン授業は、1コマ30分を3コマ各学年均等に配分し、兄弟・姉妹がいる家庭もあることから、授業時間が被らないよう工夫して時間割りを組んでいる。
- 本校では、「Zoomを使いライブ形式でのオンライン授業」に加え、「Google ClassroomやGoogle Driveを駆使しながら毎週課題を与え、それを先生に添削してもらう等の通信教育」、主にこの2つの形態で授業に取り組んでいる。

⑤ 苦勞した（している）こと

- 刻一刻と変化する状況、しかも誰もが経験したことのない緊急事態に対応するのが一番苦勞した（している）点。
- 現在でも（5月24日）自宅待機命令が発令中のため大変だが、特に2月下旬からオンライン授業が始まる4月18日までの間は、メール、電話、TextやLINE、ビデオ会議を駆使しながら、とても短時間の間に膨大な情報量进行处理し、スピード感を持って適切に対処していく怒濤の毎日だった。
- 一度決めた取り決めも数時間後には見直しが必要のようなケースも多々。前述の卒業式もその一例で、急速に拡大する感染状況から、卒業式は1週間前倒しと急遽決定し、準備期間2日という厳しい条件だったが、卒業生とその家族のみという小規模開催で奇跡的に挙行する事ができた。今考えても本当にギリギリのタイミングで、ひとつ歯車が噛み合わなければ恐らく無理だったと思われる。

- もう一つ苦勞した点と言えば、やはり、オンライン授業への移行。過去に山火事、大学の停電等で休校になった時はあったが、長期間の休校は過去になく、ビデオ会議機能を使ったオンライン授業など、創立42年の歴史で案にも上がった事はないと思われる。
- オンライン授業に関して、発案から施行まで、短時間の間にクリアしなければいけない課題は山積。オンライン授業と言っても、様々な形式があるため、どの様な形態で授業を行うのがベストなのか考える必要があった。
- また、ビデオ会議のサイト、課題の提出のやり取りなど行えるサービスも多種多様。まず何が我々のニーズに適しているのかそれぞれを調べあげるところから始まり、候補を絞り試験運用、先生方との協議も繰り返し行った。
- それと並行して、各家庭の機材環境のアンケート実施、今後の見通しの説明。それらを総合し、各種サービスの一長一短を資料にし、先生方の意見を参考にしながら最終的に今の形になった。

- オンライン授業の開始が正式に決定した後は、保護者をグループ別けし、実際に模擬テストを行い、アクセスの不具合はないか、又、今後の流れを説明すると同時に、各家庭の状況も把握、不安感の改善にも努めた。
- オンライン授業開始後も、スムーズにログイン出来なかったり、画像は見られても音声が届かなかったり等、技術的な問題も多数あったが、その都度対処し、現地校もオンライン授業をしていることから、生徒・保護者も徐々に慣れてきた様子。
- ただ、多くの現地校もGoogle Classroomのようなオンラインサイト使って毎週の課題のやり取りをしているため、その連絡や確認のメールは保護者に届き、補習校でライブ授業の間は保護者が隣にいないといけないなど、保護者への負担が増しているのも事実。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 新型コロナウイルスについては、まだまだ先が見えないため、不安な日々は続いている。また、3月19日より2ヶ月以上も自宅待機命令が続いているため、子供達も親も皆ストレスフルな日々を過ごしている。
- ただ、今回の新型コロナウイルスに関してポジティブに捉えられる点も多々あった。まず一つ目は、学校全体の一体感が増したように思えること。
- 教員、保護者、理事会・事務の皆が一丸となって、この難局を乗り切るという意思が感じられ、この状況を理解し、「大変だけどまずやってみよう」と、非常に協力的。
- オンライン授業という事で、特に低学年の生徒など、集中力が持続するのか、オンライン授業で補習校のペースの速い授業についていけるのか等、一抹の不安はあったが、保護者の献身的なサポートもあり、生徒も毎週土曜日の授業もきちんと参加出来ており、コンピューターの画面越しだが、クラスメイトとの片時の再開を毎週楽しみにしているようである。

- それともう一つ。それは、先生方の教育に対する情熱、生徒に対する愛情を改めて拝見する事が出来たこと。
- 本校では当初、ライブのオンライン授業は、ホームルームの様に先生から生徒たちの連絡の場として使用してもらい、授業に関する課題は少し触れる程度でメインは通信教育と考えていた。
- しかし、生徒の事を一番に考え、先生方も何回ものビデオ会議で方針を決め、2週間という短い準備期間ではあったが、最大限の努力で4月18日の授業初日に備えて頂いた。
- あまりコンピューターに詳しくない方もいるが、先生同士でテストをしながら教えあったり、また、慣れないオンライン授業のため他学年のクラスに自主的に参加し、少しでも多くのことを吸収しようと努力して下さったりしている。

- 生徒の自主勉強をアシストするべく読み聞かせや漢字の書き順動画を作成して配布したり、音読動画を撮れるようなアプリを導入したり、授業時間とは別にプレイデートという名目で毎週一回生徒を集め、Zoomを使ったソーシャルセッションの場を設けて下さっている先生も。
- 先生方のこのような努力は、生徒にそのまま伝わり、今回のオンライン授業移行に関し、多くの保護者から感謝の言葉を頂いている。
- 今まで以上に学校に一体感があるというのは、まさにここにあるように思う。

⑦ 今後への課題

- 今後への直近の課題は、オンライン授業に関する見極め。
- 当初は、大学は9月の秋学期から対面式の授業を再開し、それをもって本校も通常授業に戻るという青写真を描いていた。しかし、前述のとおり、つい先日サクラメント州立大学学長より12月いっぱいにはオンラインのみという発表があったため、最低でも2020年は、大学での通常授業は出来なくなったという事になる。
- 今後、徐々に解禁の動きが見られ、仮に9月から現地の公立校が再開となった場合、そのような施設を借り、補習校も対面式の通常授業再開という選択肢も考えられる。
- 通常授業が再開する事になれば、新型コロナウイルスに関する取り決めも新たに必要になるため、そういった協議もしていかななくてはならない。
- それとは逆に、オンライン授業を継続しなければいけなくなった場合、新たな授業計画を考えなくてはならない。
- また、オンライン授業をより充実したものにする為に、学校全体でアンケートをし、継続して欲しい点、改善が必要な点など、教員、保護者それぞれの立場から意見をヒアリングする必要があると考えている。